
御狐様のIS日和

あいあむウィーゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御狐様のIS日和

【Zコード】

Z7293Y

【作者名】

あいあむウイーゼル

【あらすじ】

女性にしか動かせないパワードスース「インフィニット・ストラトス」、通称IS。そんな中で世界初の男性IS操縦者、織斑一夏が発見されたというニュースに世界が揺れる中、女神達の学舎に1人の少年が現れる。彼の名は神崎玖楼。『世界最強』の高校教師であつた……。これは『魔法先生ネギま！ 御狐様が見てる』の逆転作品です。ついでに言つと、これは作者が書きたいと思った自己満足要素が詰まっていますので、タグを見て「無理だ」と判断された方はお帰りください。

第1話・新世代型“疑似”子供先生、IIS復活（前書き）

えー、前置きもなくやつちまいました。

「御狐様」のIIS版。つまり、逆転版です。

御狐様ではネギまを舞台にしていましたが、こつちでは逆です。IISを舞台上に頑張って貢います。

玖楼のイメージはあつちと同じですが、その最強さがパワーアップしております。

ちなみに、私がイメージする最強教師は「等身大の光の巨人」と称されるあのです。あそこまで何もかも力尽くでぶつ飛ばしませんが、それくらい強いのでご注意を。

第1話・新世代型“疑似”子供先生、ハハ元復活

やあ、ボクは神崎玖楼。ハハ普通の専業主夫だ。

「そなたを『普通』と形容すれば、間違いなく常識が破綻するじやろうな」

「ううむ、そこ黙れ。

ソファに寝転んだままの妻、瑪瑙にうつしき口みつとも、手を休めない。

ちなみに、今日のハジ飯は鶏ムネ肉の竜田揚げ。

ムネ肉は安いんだけど、パサついて美味しいくない。そこで調理の前にサラダ油につけ込んでおくのがポイントだ。ハハする事でパサつきが無くなる。

醤油とお酒、それから擦ったにんにくを合わせたタレで下味を付け、小麦粉をまぶしてカラッと揚げる。

「ほり、出来たよ」

「うむ」

瑪瑙が立ち上がると、椅子に座る。

「ボクも出来上がりつたばかりの『じ飯』をテーブルに並べ、同じく椅子につく。

「ところで玖楼。就職するところのは本当か？」

「耳が早いね」

就職といつよりも、復職に近いかな。

数年前まで教職に就いていたボクだけども、数年前のとある事件で怪我をして以来、療養中。

怪我 자체はもう癒えてるから、復帰しようと思えばいつでも復帰出来るわけだけど。

もちろん年単位で遠ざかる事は分かっていたから、前の職場には自主退職という形で辞めた事になつていて。

「最初は断りうと思つたんだけど、内容が内容だからね。それに纏木さん直々に頼まれやつたし」

「……纏木、じゃと？」

「や、纏木十蔵さん」

IIS学園の学園長…………もむらさん、表向きの学園長は轡木さんの奥さん
さんが務めている。

普段は気のいい用務員として表に立っているから、本当は彼が学園のトップにいる事を知っているのは、教員や関係者ぐらいって事だ。

で、その轡木さんがこの前訪ねてきたんだけど…………。

「復職、ですか？」

田の前の男性、轡木さんから持ちかけられた話に、思わず尋ね返してしまつ。

「ええ。お願ひ出来ませんかね」

「…………しかし、何で自分なんですか？ 言っちゃなんですか？
IHS学園でしょ？ だつたらIHSに携わる人間…………うちの妻のよ
うな人間がいいはずです」

「…………正直に言つとだけど、瑪瑙は絶対人に物を教える立場には向
かない。

「ボクは確かにIHSの知識は多少あるけども、実際にIHSに乗れるわ
けではない。

「だから教えられる事と言えれば、普通の中學で教えるようなカリキ
ュラムぐらいで…………。

「だからこそ、ですよ。…………IHS学園はIHS操縦者を育成するた
めの教育機関です。教育内容もIHSに関連する事に偏つてしまいま
す」

「…………まあ、それでちょっと前に叩かれてましたしね」

「基礎学力の低下。IHS学園に関する事だけでなく、全国的にも問題
となつていてる。

特にIHS学園は今、櫻木さんが言つた通りに教育内容が偏つていて
ために、普通校と比べて基礎学力の平均が低い。

でも、その事にしたってわざわざこいつやって主夫してるボクを引っ張り出さなくとも、そっち方面でやり取りして普通教師を回してもらえばいいはず。

「…………要するに、それだけじゃないつて事ですか？」

「相変わらず、察しがいいですね」

「いえいえ」

「こやかに応対しつつ、轡木さんは何かのファイルを取り出した。どうやらこれを見込んで欲しいらしい。受け取ると、それに挟まれていた書類に目を通す。…………あれ、この子って」

「織斑一夏…………織斑千冬君の弟さん、ですよね？」

「おや、こ存じでしたか」

「元教え子の家族くらい憶えてますよ。それに彼女はちょっと特殊でしたから」

織斑千冬の名を知らぬ者は、この世界でも少ないだろう。

ISの国際大会『モンド・グロッソ』。その第1回大会で、たった一本の剣を手に、世界の頂点へと上り詰めた少女の名前だ。

世界最強とまで呼ばれた彼女だったが、3年前の第2回大会、個人競技の決勝戦を突然放棄。その後、現役から引退したと聞いている。

実を言つと、ボクは彼女の中学時代の担任だったのだよ。驚いた？

「しかし、どうして一夏君が出てくるんです？」

「先日、HS学園の入学試験が行われました。その場で彼は試験用に運び込まれていた機体を起動させたのです」

「…………すみません。もう一度いいですか？」

「織斑一夏君は、世界で初めて発見された男性HS操縦者、というわけです」

…………おおう。もう読めた。

内心ため息を吐きつつも、もう一つの仕事について口にする。

「護衛ですか

世界初の男性HS操縦者となれば、世界中からの注目を浴びる。

そうなれば、今後の彼の生活が脅かされる。どつかの研究機関に送られてホルマリン漬けか、モルモット扱いか（まあ、そんな事した

ら織斑君（姉）の怒りを買つだらうから、表立つて動いたりは出来ないと思つけども。」

少なくとも、今までの通りの平穏な生活は出来なくなる。そのための救済策が「IS学園行き」というわけか。

「本当なら、生徒に潜り込ませる事が出来ればよかつたのですが……」

「思春期の男子には辛いことひがあるでしょうね」

同年代の女生徒に囲まれ、冷や汗を流す彼の姿。

リアルにそれが想像出来てしまい、思わず苦笑してしまつ。

世の男性方からすれば、リアルでハーレム状態なので羨ましいにも程があるだらう（女子校の実態なんてそんなもんじやないけど）。

それでさらに女生徒を側に置くというのは問題がありすぎる。主に彼の精神面について。

「それで自分に白羽の矢が立つたわけですね？」

「ええ。腕の立つ人物で、尚かつIS学園に入る事の出来る男性……該当するのは君くらいでしたから」

そりゃあね、昔つからちゅうと荒つぽい事とは縁があつたから、腕には自信がある。

……でも、それだつたら轡木さんがやればいいじゃないですか。

「いえ、私も年ですからね。さすがに昔と比べると毎ひつに身体が動かないわけですよ」

年は取りたくないものですね~、と言いつつもお茶をすする轡木さん。

嘘つけ、と言いたくなつたけども、お茶と一緒にそれを呑み込む。画面の向こうのみんな、考えた事は無いかな? どうしてこの人が、護衛も付けずにボクの家にまで一人でやってきたのか。

確かに、この人が実質的なIIS学園の経営者だという事を知つている人間は限られる。でも、知つてゐる人は知つてゐる。当然、狙われたりする可能性だつてある。

それなのに何故、護衛を付けないのか。その答えはシンプルイズベスト。「必要無い」からだ。

たかが暗殺者の1人や2人、この人なら.....轡木十蔵なら、赤子の手を捻るようにしてしまつだらつ。

「まあ、それはさておき、どうでしょ?」

…………復職する事自体はそこまで問題じゃない。

今のボクはあくまで専業主夫だし、復職出来ないという状況ではない。

でも、復職せずともいい。実際、瑪瑙は高給取りだから生活には困つていなかり。

要するに、「どちらを選ぶにしても問題は無い」のだ。

(…………でも)

実はまだ、引っかかっているところがある。

織斑一夏君がIIS学園の入試会場にて、IISを動かしたという事実。

資料によると、同日に藍越学園の入試も行われており、どうやら彼はそつちを受験するはずだったようだ。

単に会場を間違えて、それでたまたまIISが設置されていた部屋に迷い込み、たまたまIISに触れてしまった事が発端。そう考えれば楽だけど、そこまで偶然が重なるものなのか。

そもそも、IIS学園の受験者は女性だけ。同年代の男性がいたら、受験者なりスタッフなり誰かが「会場間違えますよ」と声をかけるはず。それにIISが保管されているとなれば、警備だつて整つて

いる。15歳の少年が近づけば、誰だって不審に思つ。

そしてEISを起動させたのがミソだ。たまたま動かせる“何か”があつたとも考えられるが、他にも『誰かが細工していた』とも考えられる。

これらの状況を作る事が出来る存在に、ボクはたった1人だけ心当たりがあつた。

「…………分かりました。その話、お引き受けします」

「…………なるほど、あのウサギか

竜田揚げを口へと運びながら、そつそつと瑪瑙。

彼女がウサギと形容する相手、それはエスの生みの親……篠ノ之束博士の事だ。

エスの中枢とも言える「エスコア」は、今も尚ブリックボックスとされており、完全に解析されていない。

何故、男性には動かせず、女性にのみ動かせるのか。

エスコアにこそ、その謎があるとされているが……真相を知るのは篠ノ之君だけ、というわけだ。

「織斑一夏君の事が全て彼女の仕業かどうかは分からぬけど、疑わしいのは事実。……それに」

「それに？」

「…………うん、何でも無い」

まあ、轟木さんの話を受けたのはその事だけじゃない。

教育者として、やつぱり学力低下問題は見過しがせないって感じもあつた。

自分一人でどうなるか分からぬけど、無為に日常を過ぐしてゐるくらいなら、少しくらい職場復帰してみようと思つたわけだね。

「それに、そろそろ彼の事も隠しきれなくなつてくるだらつ……」

委員会からマスコミに圧力をかけているとまでは言つても、限界がある。

人の口には立たれない。どこか隔絶された場所なりともかく、判明した場所は一般人も踏みに入る入試会場。

ボクの私見だと、明日明後日辺りには報道されるんじゃないかな？ どちらにせよ準備自体は整つてゐるわけだし、抑え込む必要もそろそろ無くなつてくるのだから。

「…………しかしHIS学園となると、そなたは向こうに住み込む事になるじやない？」

「まあ、そうなるかな」

学生寮に住むわけにはいかないし、適当などヒントでも張ろうかと思つてたけど。

さすがに、家から通りまぢゅうと遠すぎる。片道何時間かかると思つ。

そんな事を考へてみると、突然瑪瑙が悲痛な叫びを上げる。

「妾はこれからどうやって生きていけばいいのじゃー？ 誰に食事

の支度してもいいやない?」

知るか。

……なおその後、どうやら職場に住み着いたらしく、定時連絡の時には上の娘と下の息子の引き攣つた顔を見る事となつた。

とりあえずごめん。果てしなくごめん。

第1話：新世代型“疑似”子供先生、ここに復活（後書き）

IS関連で考えてたネタ

1 - ISで復讐モノ

主人公が「白騎士事件」で家族を亡くし、復讐を誓つお話。既に似た話がありますし、書いちやうと矛盾する部分が出てくる+よくあるアンチ物になっちゃうかなと思ったので、書くのをやめました。

2 - IS × 仮面ライダーOOO

一夏を映司のポジションに置いて、原作開始の1年か2年前にオーブとして戦つていた過去捏造モノ。

誘拐事件がきっかけで、映司と似た様な「乾いた」状態になり、どことなく千冬ともギクシャクした関係が続いていた中でアンクに遭遇。已む無くオーブに変身して戦う事に。

鴻上ファウンティーションがオーブのシステムを再現したISを開発。白式でなくそつちに乗る事に。

ヒロインは鈴、もしくは口奈。後に打鉄式式をバースのシステムで完成させる話を考えてました。

仮面ライダークロスだと需要があるか不明だったので、ネタとして1話だけ書いたものが存在します。

3 - 「BAD END」を練り直した話

誘拐事件がきっかけで、千春の影の人格「千影」が誕生。

千影は「千春を傷つけた」千冬達を嫌うが、千春が抱く千冬達への愛は変わらない。

オリキャラを減らして、束を若干常識人化。束を千春と千影の理解者に。

これはこれで面白いかなーと思つてますが、やつぱり無理があるかなーと思つてます。

第2話・神崎家の変わらぬ日常（前書き）

神崎家と言つても全員は出てきません。

なお、神崎家の子供達は宝石の名前にちなんでます。……

傍から

見たら一部DQNネームかもしれません。

第2話・神崎家の変わらぬ日常

「と言つわけで、新学期からHJK学園で1年生の一般教養科目を担当する事になりました。神崎玖楼です。よろしく」

その人の姿を見た瞬間、凍つてしまつたのは不覚としか言い様が無い。

新学期が始まる前、新任の教師が数名来るというので、その紹介の場に立ち会つたが、まさかこの人がいるとは……。

「や

哩然としている私に気づいたのか、ここにこしながらそつ挨拶してくれる神崎先生。

この人は……何一つ変わつていない。全く変わつていないのである意味怖い。

「…………神崎、先生」

「織斑君、久しぶりだね～。中学卒業以来だから…………もつ8年だつけ？」

「ええ。先生も…………その、お変わりなにようで」

どうにかその言葉を搾り出す。

「それ褒め言葉として受け取つていいいのかな？」

……いえ、他に何を言えと？

だってあなた、あの頃と全く変わって無いじゃないですか。

「あの……神崎先生。織斑先生とお知り合いなんですか?」

と、私の隣にいた山田君が尋ねてくる。

ああ。私の中学時代の恩師…………2年と3年の時は担任だった。

「そうなんですか？」
「あれ？」

私の言葉を聞いて、山田君が首をかしげる。他の教師陣も何やら微妙な顔になり始める。

「……………どうやら気が付いたらしい。私が何故、「変わつていな」」と
コメントしたのか。

神崎先生は相変わらず「ここここ」としている。山田君が代表して、その質問を投げかける。

「つかぬ事をお聞きしますが……」

「うん?」

「神崎先生つて、おいくつですか?」

……そう。神崎先生は私が中学生だった頃から容姿が全く変わつていはない。

しかも見た目が小柄で童顔なので、中学生ぐらいにしか見えない（山田君も大概だが）ので、中学時代もスーツを着ていなければ同級生に見間違えられたくらいだ。

あの頃、生徒の1人が「先生つていくつなんですか?」と問い合わせて、その答えを聞いた時の衝撃は今でも憶えている。

今回、山田君達が憶えるであろう衝撃は、あの頃の私より数倍上である事は間違いない。

「去年が厄年だったから、今年で43だね。ちなみにこれでも子持ちだよ」

「え」

……その瞬間、凄まじい叫びが響き渡った。

「まあ、毎回毎回年齢の事でとやかく驚かれてたからね。もう慣れ
ちやつたよ」

ここにこ笑顔を崩さぬまま、神崎先生が私の後ろを歩く。

同じくその隣を歩く山田君もよつやくショックから抜け出せたらしく、苦い笑みを浮かべている。

……気持ちは分かる。あの容姿で四十路はあり得ないと言いたい。

それも何か特別な事をしているわけではなく、素であななのだから、女性教師からしてみれば羨ましい以外の何物でもないだろ？

「それにしても神崎先生。何故再び教師に？」

何年か前の同窓会で聞いた話だと、数年前に教職を引退したという。

その時は神崎先生は出席されていなかつたので、当人から話を聞く事は無かつたのだが……。

「色々あつてね。……まあ、大きな理由は理事長から頼まれたからなんだけど」

ああ、なるほど。

この学園の理事長は表に出る事はあまり無い。そういう事は奥方に任せ、普段は違つた形で生徒達と接している。

そして神崎先生だが、……私たちでは想像出来ないほど広く深いツテを持つている。理事長と縁があつたと言つても不思議では無い。

「それにしても、君も大分変わつたものだね」

「…………いえ」

抜き身の刀。

かつて、神崎先生は私をそう例えた。触れるもの全てを切り裂く刀その物だと。

「昔の織斑先生と、そんなに違つんですか？」

「うん。…………いや、懐かしいね」

確かに懐かしいけども…………私からしてみれば複雑だ。

あの頃の私は、ただ一夏を守る事に必死で、いらぬ敵を作る事もあつた。

そんな時にお世話になつたのが神崎先生。私の事情を知つた上で色々と便宜を図つてくれて…………だが、当時の私はそれすらも煩わしく思い、事も在るうに先生に喧嘩を売つた。

…………気がつけば、握っていた竹刀は粉々にされ、私は仰向けて倒れていた。

（…………今でも、この人には勝てる気がしないな）

「まあ、それはともかく。これからよろしくお願ひします、織斑先生」

そう言って、神崎先生が手を差し出してくれる。

少し迷つたが、私はその手を取つた。

「これからは生徒ではなく、教師として同じ立ち位置で接していく事となる。

教師の任を勤め上げているかどうか定かではない私が、それをも果たせるか不安だが。

「…………あれ？」

と、神崎先生が立ち止まる。

その部屋からは何かおどりおどりして空氣といつか、とにかく悲痛な雰囲気が漂つてきている。

…………やはり、それに気がついて立ち止まつたらしい。

「や」は生徒会室ですよ」

「いや、プレート出してあるからそれは分かるんですけど……」「の悲痛な空氣は何」

神崎先生の言葉に、私と山田君は顔を見合わせてしまつ。

あのバカは。まだ立ち直つていなかつたのか。

「珊瑚ちゃん、『』飯まだですか～？」

「セツジヤ。まだか？」

「…………まだ、すこしまつてて」

私と義母様の声に、珊瑚ちゃんがやや苛つきながら答える。

だつて～。私は最近忙しくて料理できないし、母様だつて料理は壊滅的だし～。珊瑚ちゃんは父様と同じで料理上手でしょ？

「ひていしない」

やつ言いながらも、フライパンを振るつ手を止めない。

………… わたして、いじで自己紹介をさせていただきます。

私は神崎家長女、神崎琥珀です。年齢は……秘密ですが、主に
国内のある研究所で生体関係のお仕事をしています。

「ちょっと待て。妾の料理が壊滅的とは何じゃ！」

「あは～。母様の料理が美味しかったら、この世の料理全て至高の
メニューに掲載されますよ」

「じじひ。ねかあさん、りょうりへた」

…………あ、何か突き刺さつてゐる。ぐわぐわと聞こえる音。

ちよつと言ひ過ぎたかもしませんね。反省はしています。しかし、
後悔はしていません。

今、あそこで哀愁を漂わせるのが私たち兄妹の母親、神崎瑪瑙。
…………どう見ても20代にしか見えませんが、あれでも四十路です。
父様と同じ年です。43です。

ああ見えて、母様も私と同じく研究者。分野は違いますが、かなり
優秀な方だと言ひ話です。

そして、今じつちで料理を作つてゐるの……。

「つよ、つづけやう。はなしかけるな」

神崎家の次男。私たちの末の弟、珊瑚ちゃんです。

容姿と言動こそ幼いですが、兄妹の中では一番の有望株。珊瑚ちゃんと同じか、それ以上の才覚を秘めてるとされています！

……おっと熱弁しそぎてしましました。

あとは…… そうそう、ここにいない人達の紹介もしないと。

まず私たちの父様、神崎玖楼。母様と同じ年で、ちょっと前までは専業主夫だったけど、なんやかんやでEHS学園の教師になったとか。

次に長男の紫水。私たちの兄様で、今どこにいるのか1番不明な人。いい人なんですが、父様に次ぐトラブル体质で、とにかく運が無い。2年か3年ほど前にも事件に巻き込まれて、仕事クビになつたつて聞いてますし。

そして私の双子の妹！ マイ・スイート・エンジェル翡翠ちゃん！

！ 今はイギリスのどこかの貴族さんの家でメイドをしてるって聞いてますけど。うう、もう最後に会つてから1年経つのよ？ たまにはお姉ちゃんに会いに来て欲しいな。

……うん、ちょっとズレました。次行つてみましよう。

最後になつたけども、神崎家三女の瑠璃ちゃん。私たち3人の妹で、

珊瑚ちひやんのお姉ちやん。今はある意味、父様に一番近い位置にいる。と叫つのも……。

（あの子、代表候補生……でしたっけ？ ソーゆーになつたつて聞いてますし）

この前、嬉しそうに報告していましたから。

国家代表の候補生だから、代表候補生。国の次代を担うIIS操縦者に、あの子が選ばれたのは姉としても嬉しいと思つ。

けど、それはすなわち、IIS操縦者養成のための教育機関へ進む事が決定された事であり……つまり、あの子はIIS学園の生徒になる。

……きっと父様がIIS学園の教師になると聞いて、一番喜んでいるに違ひない。あの子、父親大好きっ子だから。

この場合、防波堤になるのは母様の役目なんですが……。

「妾……料理下手じゃないもん。玖楼だつて『美味しい』って言つてくれたもん……」

「うん、ほつときましょう。…………

拝啓、本音へ。

友達がファザコン過ぎて困る。何とかして。

「…………瑠璃、もう少しあと落ち着いたら？」

「だつて、学校でもパパと会えるんだよ？ 楽しみだな～」

我が友人、神崎瑠璃は極めて重度のファザコンである。

女の子なら小さい頃思つであろう「大きくなつたらお父さんのお嫁さんになる！」という野望を、15になつた今尚も抱き続けており、虎視眈々と実の父親を狙つている。

最大の敵を実の母親と言つてのけるほど、父親への愛が溢れ出でてい

る様を見る度に、正直引く。

それでも友達やめてないのは、やつぱりこの子の事、好きだからだ
らうな。

(………… わかがに度を超えてるのは引くけど)

父親の事を想いながらくねくねしてるのを見ると、やつぱり気持ち
悪くなる。

「それより、簪ちゃんはどうなの？お姉さんとつまみ行くってん？」

突然、くねくねするのをやめて真剣な顔でそう問い合わせてくる瑠璃
に、思わず返答に困る。

私のお姉ちゃん……更識楯無は、IIS学園の生徒会長で現ロシアの
国家代表。

何をやらせても100点満点の超が付くほどの完璧超人。それが周
囲からお姉ちゃんに対するイメージ。

そんなお姉ちゃんに私は、どう接していいか分からなかつた。

「…………お姉ちゃんなんて、どうでもいい

「もしかして、まだ仲直りしていないの？」

呆れ顔の瑠璃だけど、私にも譲れないものがある。

1ヶ月ほど前、ひょんな事から瑠璃と知り合ってしばらくして、瑠璃がお姉ちゃんに絡まれた。

本音に聞いた話だと、何でも私と仲良くしている女の子がいるとの姉ちゃんが知つて、それでちよつかい出しに行つたらしく。

お姉ちゃんの行動が、私を心配してのものだとこいつのは分かる。

でも、だからと黙つて友達に「消す」とか物騒な単語を言い放つのはやり過ぎだから、私は悪くない。

「あの時のお姉さん、すげー」「この世の終わり」みたいな顔してたし、相当落ち込んでるんじゃない？」

「あのお姉ちゃんが落ち込む？」まさか

あれくらいで傷つくんなら、どんなガラスのハートなんだか。

……なお、私は知らない。

あれから1ヶ月間、私に言われた事が原因でお姉ちゃんが真っ白な状態に陥つたため、IS学園生徒会の機能が停滞している事を。

その所為で、お姉ちゃんの仕事を全部虚がしてるので（普段から大半押しつけられてるらしいけど）、虚のストレスが凄い事になつてる事を。

そんな事を瑠璃経由で知る事になるのは、数日後の事である。

第2話・神崎家の変わらぬ日常（後書き）

よく分かる人物紹介

神崎玖楼：神崎家父。主人公。教師。合法ショタ。

神崎瑪瑙：神崎家母。ヒロイン。科学者。基本的にダメ人間。

神崎紫水：神崎家長男。流浪人。トラブル体质。

神崎琥珀：神崎家長女。科学者。腹黒マツド。

神崎翡翠：神崎家次女。メイド。苦労人。

神崎瑠璃：神崎家三女。代表候補生。重度のファザコン。

神崎珊瑚：神崎家次男。学生。天才肌。

うちの楯無さんはシスコンのイメージが強いです。

Fate風にステータスを考えてみると、こんなスキル持ちです。

シスコン：姉妹に対する愛情度を示すスキル。愛情度によって能力が変化する。

A：姉妹絡みの事柄において、能力が限界以上に上昇するが、その分視野が狭まって空回りしてしまい、（精神的に）自滅する可能性もある。

D：姉妹絡みの事柄において、能力が多少上昇する。

Aは琥珀と束、楯無さん。Dは一夏です。

ちなみに「姉妹」と「兄弟」に入れ替えたブラコンスキルもあり、その場合の千冬はA+を想定しています。

ええ、完璧に冗談なので本気で受け取らないでください。

ただ、うちの樋無さんはこんな人です。
それで失敗する人だと思ってください。
妹の事で暴走してしまい、

第3話・フラグは建つ時に建つ

「…………」

神崎先生が固まつた。困つた顔で私たちを見てくれる。

私も何が言いたいかは分かるんです。ただ…………どつじよひもない
んです、こればかりは。

生徒会室の前で『中に入つてもいいか』と、神崎先生が私たちに質
問した事がきっかけでした。

さすがに、あんな状態の更識さんを見せるのは少し迷つたんですが、
そこまで強く断れる話じやないので、生徒会室の扉を軽く開いてみ
ました。

………え、あれから1ヶ月ですし、少しほんくなつてると思つた
んです。ですが……。

「…………会長、仕事してくださー」

「ハハ……簪ひやへん」

げんなりした様子の布仏さんと、机に突つ伏したまま負のオーラの
発生源となつてゐる更識さん。

ああ見えて、この学園の生徒会長です。

普段はカッコいいんですよ？ 人望ありますし、ロシア代表ですし、学園最強ですし……。

「最初の一週間は大変だったんです。もつ部屋に引きこもって……」

…

織斑先生が困った顔でそう告げる。ええ、あの頃は大変でした。

調子に乗った新聞部が「学園最強を破ったのは誰だー？」って号外出してましたし。

事情を知ってるひととしてみれば、どう反応をしていいのか分かりませんし。

「何があつたんです？」

何でも更識さんが妹さんと喧嘩して、それでショックを受けてこうなつたとか。

私たちも詳しく知らないんですけどね。ただ、妹さんを溺愛している反面、あまりうまく行つてなくて、その時のショックが凄まじかつたと。

「…………その妹って、もしかして更識簾ちやん?」

「あれ、ご存じなんですか?」

「つむの娘の友達。…………そつか、あれが原因か」

腕を組みながら、何やら納得している神崎先生。

えっと、何があったか知ってるんですか?」

「いや、僕も聞いただけなんだけど…………」

「今日、私は倉持技研に来ていた。」

と言つのも、私の専用機（になる予定）のトライアルが実施される

ため。

機体の準備が終わるまで時間がかかるので、少し息抜きに飲み物でも買ってこようかと廊下に出ると……。

「神崎瑠璃ちゃんね？」

そう呼びかけられた。

振り向くと、そこには私と同じくらいの歳の女の子が立っていた。

青い髪に服の上からでも分かる抜群のプロポーション、むう、ママには及ばないかもだけど、歳の割にはかなり立派なモノをお持ちで……。

はて、この人どこかで……。

「そうですが、どちら様で？」

見た事ある気がするんだけど、思い出せない。

うーん……直接会ったんじゃなくて、誰かに似てるのかな……？

「はじめまして。更識齋の姉です」

「簪ちゃんのお姉さん…………？」

…………ああー、言われてみれば、確かに似てるー！

髪質と顔の作りは似てる。でも、雰囲気が違いますからねるので、気づかなかつた。

「簪ちゃんがお世話をになつて聞いて、それで挨拶したくて」

「あ、『お世話』」

何故だらつ。ここにこ笑顔浮かべてるけど、この人からは敵意のようものが感じられる。

よくよく考えてみると、これまで簪ちゃんからお姉さんの事、聞いた事なかつたような…………。

「ちよつと質問いいかしら？」

「なんですか？」

「“陰陽”の神崎家が、簪ちゃんにどんな目的があるのかしら？」

固まつた。

「……何でそれを」

「あら? 質問しているのは私の方だけ?」

今尚もにこにこ笑顔だけど…………何でだらう。IJの人の雰囲気、どこかで感じた気がする。すぐ近くなどころど。

確信した。この人は私たちの『神崎』の一族の事を知っている。

本当の目的は…………神崎の一族が何故、簪ちゃんに近づいたのか調べるため、私に接触した。

…………とは言われても、ねえ。

「いや、どんな目的って言われても、簪ちゃんは友達になつたのは偶然なんですけど」

うん、これは本当だし。

私がIFS関連の道に進んだきっかけはアスナお姉さんだし、簪ちゃんと友達になつたきっかけも、機体設定で悩んでたら通りがかりの簪ちゃんがアドバイスしてくれたから。

だから、このお姉さんが心配するような事は何一つ無い」と言つてい
い。

「…………本当に？」

笑顔を消して、訝しむような顔で私を覗き込んでくるお姉さん。

…………あ、分かった。この人、翡翠姉さんが家に友達連れてきた時の琥珀姉さんに似てるんだ。

大好きな妹が友達作つた時の、複雑というか悩ましいような……そんな微妙な感じに。

当時は琥珀姉さんの執拗なスキンシップが原因で、翡翠姉さんとうまく行つてなかつた。確かパパは……。

「嫉妬してるんですか？」

あの時のパパが苦笑混じりに放つた言葉を口に出してみると、今度はお姉さんが固まる番だつた。

やつぱり。この人の琥珀姉さんと同じタイプなんだ。

妹の事が可愛すぎて、そのあまり心配して突拍子のない行動を取つたりする。そう思つと、何だか微笑ましく思えてくる。

「な、何かしら?」

「いえ、何でも」

よし、今度簪ひちゃんにお姉さんの事聞いてみよ。

それで今日の事話したら……絶対驚くに違いない。

「待つてくれる？ 私はまだ、あなたの言つた事を信じたわけじゃないの」

どこか厳しい目で私を睨むお姉さん。

まあ、確かにこれまでの積み重ねはゼロなわけだし、私が何か言つたつてそれを素直に聞き入れるかは別問題なんだけど。

でもあんまりここで騒がしくしたりすると、それいけどもあまりよろしくない事に……あ。

「一つだけ言つておくわ。もしもあなたがあの子に危害を加えるような事をした時は……」

その瞬間、一際強い殺氣が放たれた。

あ、ヤバイって。今のよろしくない。……うわー、珍しく怒ってるよ。

「潰すわ」

「…………何を、潰すの？」

それほど大きくなこの声が廊下に響き、お姉さんは凍り付いた。錆び付いたかのよつにギギギと首を後ろへと向けて…………ちらりと凍つた。

静かな、されども確かなる怒りを宿した簪ちゃんの表情を田の辺た
りにしたから。

「か、簪ちゃん!…?」

「…………瑠璃に向じてゐの、お姉ちゃん」

冷たい田の辺がやんを田の辺たつて、これまでの威厳が嘘のよう
に狼狽えるお姉さん。

いや、これ私の所為じゃないですよ? こんなとこひで殺氣出した
のお姉さんだし、近くに簪ちゃんがいるのにそんな事すれば、まず
気がつくでしょ。

「ち、違ひのよみ簪ちゃん。」れはね、その…………

何とか取り繕おうとするお姉さんだけど、簪ちゃんの前ではつまく言葉が出てこないらしい。

どんな経緯があのつと、私に殺氣出したのは事実だし、脅迫とも思える物騒な言葉を言い放ったのも事実。

じどうもどいなお姉さんを見て、さらに怒りが大きくなつて来たらしく、簪ちゃんの後ろに夜叉が見える。これつてもしかしてスンデ?

「あ、そうー 悪いのは私じゃないわ。運が悪かったのよー。」

ブチッ……。

あまりにも空回つし過ぎた言い訳に、何かが千切れた音がした。

「お姉ちゃんのバカ! 大つ嫌い!ー!」

そして、全てが凍り付いた。

話せない部分は抜いて、瑠璃から聞いたあらすじを説明すると……
…2人は呆れていた。

いや、言い訳っぽくなっちゃうけど、わすがの瑠璃も「この世の終
わり」の「ごとく落ち込んだ彼女が不憫に思つたのか、きちんとフオ
ローは入れていたよ？

「お姉さんがちよつかい出して来たのは、簪ちゃんが心配だったか
ら」と。

「…………それでは、どうなったんですか？」

「あのままなんだろうね」

今尚もしくしくと鳥のオーラをまき散らしている会長を、視線で指
し示す。

僕もそりやあ昔色々あつたから、家族を心配する気持ちは分からな
くもない。

ま、とりあえず」の分だと、あの子の怒りが収まるまでしばらくかかりそうだね。

「…………ねえ、ネギ。本気である子に“蒼い雲”ブルー・ティアーズを渡すつもり？」

そつ、甥っ子に問いかける。

「ええ。現時点でもBT兵器の適正値が1番高いのは彼女ですから」

「そりゃそりなんだけど…………」

実力はある。それは私も認めざるを得ない。けど…………。

「…………確かにセシリアさんの性格に問題があるのは事実です」

「分かってるじゃない」

「ぶっちゃけると、英國貴族な彼女の無駄に高いプライドの所為で何度も問題が起きていますし」

あんた、ぶっちゃけ過ぎでしょ。

まあ確かに、それさえ無ければいい子なんだけどね。その所為で不用意に敵を作つて、それで翡翠や他の子が苦労してるんだけど。

あの子が専用機を手に入れて、それでエス学園に行つたとする。そうしたら、どうなる?

「絶対無駄にトラブル起つ」すでしじうね。特に、例の…………オリムライチカさんでしたつ? その人相手にくつてかかるとか」

「わうわう。それで正論で反論されて「決闘ですわー」って……

「「…………」」

…………ビヘン、リアルに想像出来る。

「でも、セシリアさんの行動もある意味正しいんですよ。そうやって田立つて、実力を誇示すれば、それが他国への牽制にもなりますから」

「そりゃあね

候補生の実力と技術力の誇示。

それがうまく行けば、イギリスではこれだけ開発が進んでますよってアピールにもなる。それ自体は私だって止めやしない。

ただあの子の場合、絶対にやり過ぎるって想像出来る。それで決闘~~競争~~になつてでもみなさいよ。

「…………何とかならない?」

「無理です。それにセシリアさんが“蒼き霊”を使つ事は政府の決定なんです」

母さんも反対したんですけど、とネギがボヤく。

まあ、姉さんも頭抱えてそうよな。なまじ付き合^いいがあるだけに、どんな人間かも分かつて、そこから問題起^ここすつて分かるから。

セシリア・オルコットが専用機を受領する理由としては、やはりBT兵器の適正値が現在登録されている操縦者の中で歴代トップだから（私？ あんなチマチマしたの無理）。

開発者であるネギとしても、やっぱり出来る限り優秀な操縦者に扱つて欲しいというのが本音だろ？」

「……………そう言えば、IIS学園には玖楼さんもいるんでしたよね？」

悪くなりかけていた空氣を払拭しようつと、ネギが話題を変える。

ああ、そう言えば何日か前にメール来てたつて。IIS学園の理事長に頼まれて、教職に復帰する事になつたとかどうとか。

瑠璃ちゃんもIIS学園に入るとか言つてたけど…………。

「…………衝突、しないといいですね」

「…………ネギ、それフラグっぽいからやめて。

第3話・フラグは建つ時に建つ（後書き）

ネギ君とアスナ、登場です。

2人がどんな立ち位置にいるのかは、また今後詳しく説明されるか
と。

第4話・少女達の来訪

神崎玖楼（旧名・高橋九郎）の生い立ちは、必ずしも恵まれていたとは言えない。寧ろ、不幸だったと言えるだろう。

高橋家は両親、父の祖父母、兄、姉、彼、弟2人、妹で構築されていた。

中小企業を経営しているだけあって、そこそこ経済力には恵まれていたが、家庭環境を例えるならば地獄だった。

児童虐待。

父親から執拗な暴力を受け、母親は家庭環境を嘆くのみ。人一倍優秀な兄は弟や妹達を蔑み、祖父母は見て見ぬ振り。

九郎はその中で、幼い弟達の防波堤となり、暴力の受け皿となる日々を送っていた。

学校生活はごく普通。成績は上の下。交友関係はそこそこ……。家庭の事を差し引けばごく普通の少年に映つただろう。

しかし、彼には1つだけ誇るべきものがあった。……驚異的な身体能力である。

小柄な体格でありながら、彼の運動能力はズバ抜けて高かったのだ。小学生でありながら大人の記録を上回る能力を、大人達は羨望の目

で見つめた。

もしも違う道を歩んでいれば国際的なスポーツ選手に成長していたに違いない。

しかし、その事を「調子に乗っている」という理由で暴力はエスカレート。その幼い身体には消えない傷が一つずつ増えていった。

彼自身、自分に自信が持てない事、さらに大人達の視線が気になり、どうにも出来ない。

弟達を守る防波堤として日々を過ごし、学費はアルバイトで貯め、いつの間にか彼は高校生になっていた。

勉強は出来る方だったため、県内でも有数の進学校に入学する事に成功した。

大学に進もうとは思わない。せめて、弟達を養うだけの力が欲しい。

学校卒業と同時に就職を決意していた九郎だったが、ここでも思わず出会いをする事となる。

「神崎瑪瑙じや！ 最初に言つておく、妾はこの学園のトップを奪いに来た！！」

その発言にクラスの男子が歓声を上げる。女子は冷ややかに見つめて……と思ったら、うつとりとした表情で瑪瑙を見つめている。

が、その中で唯一九郎だけは呆然としていた。

なんだこれは。何が起こった。

「ふむ……なかなか好感触じやの」

黒髪を優雅にかきあげ、席へと戻る瑪瑙。

傾国の美女……否、まだ年若い故に『傾国の美少女』とでも形容すればいいのだろうか。

黒縄のよしに一切混じり無しの黒い髪。白く透き通った肌に端麗な顔立ち。100人中100人間違ひなく、美少女だと公言するであろう美貌の持ち主。

九郎自身、彼女は美しいと思った。男子達を虜にするだけのものはある。

だが、そこまで熱狂するほどの理由が分からぬ。……ぶつちやけ、引く。

「む？ そなた……」

と、席へ戻る途中、男子の中で唯一冷静な九郎に視線を向ける。

これだけの美少女に注目されて、動搖しないはずがない。

これまでの人生において、ここまで緊張した出来事があつただろうか？ いや、ない。

そもそもここまで美少女にお近づきになれた記憶すらない。

「……よし、決めたぞ」

何やら考えていたようだが、意を決して九郎の顔を両手で取り……

「んっ！？」

一気に自分の顔へと引き寄せた。

ちゅうじ、顔と顔がくっつく形……もっと分かりやすく言つと、唇と唇がくっついている。

クラスが凍り付いた。この中で、今現在起きている事態を呑み込めている者がいるだろうか？

沈黙する中、くちゅくちゅと水音が響く。

一方的に瑪瑙の舌が九郎の口内を蹂躪している。

数秒後、人生初のキスから解放され、顔を真っ赤にした九郎が声を

出せぬまま、瑪瑙を見上げる。

..... その一方的な蹂躪者は、何故か得意げな顔を浮かべている。
どうしよう、殴りたい。

「そなたを妾の嫁にする！」 意義は認めんッ！…！

神崎玖楼と神崎瑪瑙の運命は、この日始まつたのだ。

入学式当日、嫌な夢を見た。

「神崎先生、顔色が良くないですか？……どうかしたんですか？」

「…………いえ、少し夢見が悪くて」

体調を気遣つてくれる山田先生が天使に見えた。

…………それにしても、嫌な夢だった。

いや、体験自体は良かつたと思う。人生初のキスがあれだし、相手も申し分ない。

ただ…………あの後が悲惨だった。クラス……否、学校一の美少女からキスされ、挙げ句の果てに「嫁宣言」。これでまず、男子の半が敵に回り、しばらくの間村八分の扱いを受けた。

「神崎君も大変だねえ」と深いのかどうなのか分からぬ先生の言葉が、今も心に残っている。もしかしたら、それが教職に就いたきっかけなのかもしれない。

「心配ないですよ。体調自体はいいですから」

「そうですか？ ならいいんですが」

…………あまり昔の事は思い出したくない。

瑪瑙との出会いやらその後の事はともかく、『神崎玖楼』になるまでの出来事はほとんど口クな事がなかつた。

ま、その辺りはどうでもいい。あの頃はほとんど振り切つてる。

「自分の事を心配するより、クラス挨拶大丈夫ですか？」

山田君は1組の副担任を務める事になつていてる。

例の織斑一夏君が在籍するクラスなので、これから先色々と大変な事になるのは目に見えている。

しかも、その初日とも言つべき今日。最初のH.Rだが、担任の織斑君はまだ緊急の会議から戻つてきていない。

時間が迫つてきてるため、この分だと彼女一人でやる羽目になりそうだ。

「大丈夫です。私だつて先生なんですからー。」

大きな胸を張る山田君。

…………とはいえ、普段の彼女を知つていてる分に心配になつてくる。

(……大丈夫かな)

(これは……想像以上に辛い)

分かってはいたが、周りは全員女子。当たり前だが男子は俺一人。男性操縦者というのは物珍しいらしく、視線が俺に集中しているような気がしてならない。

……ハツキリ言つて、すつごに氣まずい。

「眞さん入学おめでとうござります。私は副担任の山田真耶です」

教壇に立つてるのは、眼鏡をかけた緑髪の女性。

体格は小柄ながらも自己主張の激しい胸をしており、健全な男子で

ある俺とじてはつこ田が行ってしまつ。

その人、山田先生が自己紹介するも、生徒達からの反応は薄い。

「あ、え……きょ、今日から皆さんはこの学園の生徒です。
この学校は全寮制。学校も放課後も一緒にです」

少し戸惑いつつも元氣に進める。

そつなんだよな。まあ、俺は自宅から通う事になつてるんだが……
いや、そうだろ。だつてさすがに女子寮に男が入るわけにはいか
ないし。

「仲良く助け合つて、樂しい3年間にしまじょうね」

そつ締めくくるが、やはり反応は薄い。

拍手の一つでもした方がいいのかもしれないが、やつぱり『まずい』
ために下手に行動を取れない。

無反応具合に、山田先生が狼狽えている。……ヤバイ、この人可
愛い。

そんな山田先生を尻目にチラシと、左窓際の席へと視線を向ける。

そこには6年前に別れた時とそつ変わらない　色々と成長して

いの部分もあるが 幼馴染の姿がある。

視線を向けているのに気づかれたが……ふいっと無視される。

(俺、なんか嫌われるような事したっけ?)

「…………ん、織斑君?」

「は、はいっ!?」

そう呼ばれ、思わず立ち上がる。

あ、そつか。自己紹介か。いつの間にか自己紹介になっていたのか。

「えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

…………それで?

そんな空気がひしひしと伝わってきてしまい、思わず立ちすくむ。

いや、これ以上何を言えばいいんだよ。趣味か? 特技か? 経歴か?

(い、いかん……)

答えるチャンスを逃した事に気がつき、詰まつた。

「のまま黙り込んだら、『暗い奴』のレッテルを貼られてしまつ。

助けを求める相手…………えと、篠！

が、やつぱりその幼馴染はいつから視線をそらす。俺にじつしつつで言うんだよ！

と、とにかく何でもいいから言葉にしなければ…………！

「い、以上です！！」

その瞬間、俺以外の人間がズッコけた。

えっと、やつぱダメだった？

「当たり前だ、バカ者」

「あたつー？」

さすがにマズかったかと思つた瞬間、脳天目がけて硬い何かが叩き込まれた。

「、この完膚無きまでに容赦のない一撃は…………千冬姉か！」

「学校では織斑先生と呼べ」

黒スーツでキリッと決めている千冬姉は、そつ一瞥すると教壇に立つ。

「先生、会議は終わったんですか？」

「ああ。済まなかつたな山田君。クラスへの挨拶を押しつける形になつてしまつて」

山田先生と交代する代わりで教壇に立つと、威厳に満ちた顔でクラス中を見渡し、言い放つ。

「諸君。私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物にするのが仕事だ」

その瞬間、クラス中から黄色い声が上がった。

いや、これはある意味仕方ない。

前にも話したが、千冬姉は現役を引退したとはいえ、今も尚多大な敬意を向けられている。千冬姉を目指にIT業界に進路を取る人だつているくらいだ。

ちなみに現役時代、男性よりも女性にモテていたらしく、いつも家には女性からのファンレターやプレゼントが届いており、辟易していた。

「毎年よくも『うバカ者ばかり集まるものだ。』まさかとは思うが、私のクラスにだけ集中させてるのか?」

「めかみを押さえつつ、千冬姉がそう呟く。

もしかしたらそつかもしれない。まだ千冬姉に押しつける形で。

「…………で、挨拶も満足に出来んのか、お前は」

とふとん、と出席簿を手で叩きながら、静かに千冬姉が問いかけてくる。

いや、その…………『ううこひ状況にはあまり慣れてなくて…………すんません。

一夏が助けを求めるような視線を向けてきたので、思わず視線をそらす。

いや、私がフォローに入るわけにもいかんだろう。そもそもどうつオローしろと言うんだ、お前は。

心中で「すまない」と謝った直後、一夏の受け狙いとしか思えない言葉に、思わず大きく体勢を崩す。

(……変わっていないな、一夏)

突如登場した千冬さんに叩かれ、頭を抱える一夏を見ながら、ふつと微笑みます。

6年しか経っていない。

6年も経つた。

時間の捉え方は人それぞれ違う。だが、人が変わるには充分すぎる時間だ。

私は…………まあ色々あつた。いい事も悪い事も平等に。

別れもあれば出会いもあって、幸せであれば不幸でもある。
千々さんに言わせると私は「変わった」人間のようだ。

どうやら一夏はあれからあまり変わっていないらしい。

いい意味でも変わっていないし、悪い意味でも変わっていない。

それが何となくおかしくて、ふつと苦笑を溢した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7293y/>

御狐様のIS日和

2011年12月1日14時47分発行